

「行基の湯」を再開します

今も昔も高松の奥座敷である塩江。そこは、讃岐山脈の山あいの大自然に抱かれた香川県下最大の温泉郷です。古くは潮江と記されており、江は井（泉のこと）が転じたもので、塩気のある泉から塩江となったといわれています。現在は保養、湯治向けの閑静な温泉街ですが、戦前は塩江温泉鉄道（ガソリンカー）で高松市街（仏生山町）と結ばれていて、旅館内の演芸場で少女歌劇が催され、「讃岐の宝塚」と称されていたこともあるそうです。

塩江の温泉は約1300年前、行基という僧により発見され、その後、弘法大師が修業し湯治を万人に勧めたという言い伝えの残る名湯です。行基は、聖武天皇に招請されて奈良の大仏を実質的に建立したとも伝えられ、仏教界における最高位「大僧正」の位を日本で最初に贈られた名僧です。その行基と、郷土が生んだ大偉人、弘法大師に由来する由緒正しき温泉なのです。

そんな塩江温泉郷のシンボリックな日帰り温浴施設として、「行基の湯」は平成12年4月に誕生しました。しかしながら、経年によるいたみが激しく、全体調査の結果、大規模改修が必要であることが判明。平成29年2月に改修工事のために休館となっていました。

その「行基の湯」を11月11日（日）に再開いたします。これまで地元関係者にご迷惑をかけ、また、多くの塩江温泉のファンの皆さまにご心配やご不便をおかけしたことをお詫び申し上げます。

高松市では、「行基の湯」の改修に合わせて、「塩江温泉郷観光活性化基本構想」をまとめました。「道の駅しおのえ」エリアの再整備をはじめ、老朽化により閉館となった奥の湯温泉があった上西地域の資源を生かした環境整備の取り組みを主要事業として位置づけています。過疎化と高齢化が進行する塩江地域ですが、高松空港に程近い利便性の高さから、近年、外国人宿泊客の増加が顕著です。また、民間事業者などが中心となって、建設技能者を育成する職人育成塾や現代サーカスの創作活動の拠点作りなど、全国初の取り組みとも言っているユニークな活動が展開されています。

改修を終えた「行基の湯」の再開を機に、塩江を「オンリーワンの価値を持つ温泉郷」に磨き上げられるよう、各種施策を展開し、新しい魅力と価値を生み出してまいりたいと思います。